令和元年度

第52回　大分県公立学校教頭会研究大会

佐 伯 大 会

研究録52

令和元年８月９日

大 分 県 公 立 学 校 教 頭 会

表紙は分科会場への経路であった
『歴史と文学の道』国木田独歩館

第52回　佐伯大会「研究録52」の発刊に寄せて

大分県公立学校教頭会
会 長 後 藤 啓 二

小学校では来年度、中学校では令和３年度から新学習指導要領全面実施となります。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、カリキュラムマネジメントの推進が求められています。また、このような中、大分県教育委員会は平成31年度（令和元年度）重点方針として、体力向上やいじめ・不登校対策といった教育課題への組織的取組を進め、教育水準の向上を図るとともに、教員の長時間勤務を改善し、子どもと向き合う時間を確保するため、専門スタッフ・外部人材の活用やＩＣＴの活用などによる業務改善を図るなど学校における働き方改革の推進を掲げています。私たち、副校長･教頭は、子どもの力と意欲の向上に向けた組織的な取組を推進するために、校長がリーダーシップを発揮できるよう学校組織を活性化し、教職員の人材育成に努めていかなければなりません。

大分県公立学校教頭会は、本県教育の発展に寄与することを期し、半世紀にわたる歴史の中で、政策提言能力を備えた職能研修団体として歩んでまいりました。大分県の重要課題である「学校マネジメントの深化」「授業改善の徹底」「体力向上の推進・健康課題への対応」「いじめ・不登校対策等の推進」等、多様な課題と向き合い、課題解決の方途を実践してまいりました。

第52回大分県公立学校教頭会研究大会佐伯大会は、＜自立・協働・創造＞をキーワードとする第11期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」の３年次として、５課題10分科会において各２本の提言をもとに活発な論議が交わされ、互いに研鑽し交流を深めることができました。「提言していただいた先生のおかげで、勤務校の地域や規模が違っても、実態に応じて意見を出し合い学び合えたことがよかった。」「限られた時間であったが、困っていることなども話すことができた。」等の声から、会員の皆様に学校組織の活性化と児童生徒の「生き抜く力」の育成に繋げるための活力を生み出すことができたのではないかと思います。また、全体会での講演では、被災地の教訓を取り上げながら命を守ることの大切さを話していただき、改めて教職員としての職責について示唆をいただきました。

この研究大会を基盤として、継続性・協働性・関与性のある確かな実践をまとめ、ここに研究録を発刊できますことを大変嬉しく思います。

最後に、大会開催にあたり、多大なご指導・ご支援をいただきました大分県教育委員会、大分県小学校長会、大分県中学校長会に厚くお礼を申し上げるとともに、大会成功に向け細部にわたって準備され、真心のこもった運営を行っていただいた佐伯市教頭会の皆様に心よりお礼を申し上げ、「研究録52」発刊のご挨拶といたします。

目　　次

１　研究主題と日程　1

２　第52回大分県公立学校教頭会研究大会佐伯大会　分科会各担当一覧　2

３　記念講演　「命を守る……食育と減災の心……　～被災地の教訓を学びに生かす～」
佐伯市役所地域振興部まちづくり推進課総括主幹　柴　田　真　佑　氏　4

４　提　　言

■■■　教育課程に関する課題　■■■

第１Ａ分科会
学校・家庭・地域が互いにＷＩＮ-ＷＩＮの関係になる教育課程を
編成するにあたっての教頭としての役割
豊後高田市立臼野小学校　旦　部　東　子　8

第１Ａ分科会
地域との連携やカリキュラムマネジメントにおける教頭の役割
宇佐市立佐田小学校　田　口　正　宜　9

第１Ｂ分科会
地域と連携し、地域のよさを学ぶ教育活動の充実と実践
―最後の一年を充実したものにするための教頭の役割―
由布市立西庄内小学校　水　島　裕　視　10

第１Ｂ分科会
指導者自身による授業時数と授業進度の管理
別府市立中部中学校　末　光　淳　二　11

■■■　子どもの発達に関する課題　■■■

第２Ａ分科会
特別な支援を必要とする児童への組織的な対応について
―校内の体制づくりと関係機関との連携に向けた教頭の役割―
大分市立丹生小学校　友　成　利　光　12

第２Ａ分科会
子どもの見方とらえ方の変革を求めて
―ユニバーサルデザイン授業の深化を通して―
大分市立城東中学校　吉　松　重　成　13

第２Ｂ分科会
子どもの実態に応じた組織的な支援と教頭の役割について
―組織的な支援を行うための校内体制づくりをどのように進めていったか―
日田市立三和小学校　猶　原　公　徳　14

第２Ｂ分科会
防災意識を高め、命を守る取り組み
―防災・減災教育の充実を図るための教頭の役割―
日田市立東部中学校　三　苫　淳　一　15

■■■　教育環境整備に関する課題　■■■

第３Ａ分科会
極小規模校における教育環境整備に係る教頭の役割
中津市立上津小学校　松　田　昌　夫　16

第３Ａ分科会
地域とともに伸びる学校づくり
―小中連携を地域協育につなげるための教頭のあり方―
中津市立山国中学校　岸　原　　宏　17

第３Ｂ分科会
生徒支援に関わる教育環境の整備について
―不登校対策に向けた効果的な支援のあり方について―
大分市立寒田小学校　宮　本　高　生　18

第３Ｂ分科会
働き方改革（教職員と子どもに向き合う時間を確保し、教育水準の向上）を推進するための文書事務等における教頭としての改善の取組
臼杵市立野津中学校　山　上　裕　二　19

■■■　組織・運営に関する課題　■■■

第４Ａ分科会
地域とともに歩む学園づくり
―家庭・地域との継続的な連携・協働を目指して―
佐伯市立蒲江翔南小学校　吉　田　　浩　20

第４Ａ分科会
学校教育目標達成に向けて組織的に取り組むための教頭の役割
佐伯市立直川中学校　市　川　　満　21

第４Ｂ分科会
学校教育目標の実現に向けた、学校・家庭・地域の組織的取組と教頭の役割
―地域の力をフル活用した取り組みの継続を目指して―
杵築市立山香小学校　小　野　誠　司　22

第４Ｂ分科会
人材育成・働き方改革に組織として取り組むための教頭の役割
―「協働」の組織となるために―
日出町立日出中学校　藤　原　　健　23

■■■　教職員の専門性に関する課題　■■■

第５Ａ分科会
教職員の自己研鑽・人材育成のための働き方改革
―機器の利用による教職員勤務時間削減の取り組み―
大分市立滝尾小学校　長　野　尊　弘　24

第５Ａ分科会
教職員の力量を高める環境づくりについて
―小・中学校の連携を通した教職員の専門性の向上と教頭の役割―
大分市立竹中中学校　志　田　やよい　25

第５Ｂ分科会
義務教育９年間で育む地域とともに生きる子どもの育成
―小・中一貫教育の推進と教頭の役割―
豊後大野市立朝地小学校　佐々木　直　子　26

第５Ｂ分科会
教職員の「資質・能力」の向上を目指した教頭の役割
―経験豊かな教職員の活用と協働的風土づくりへの取組―
竹田市立緑ヶ丘中学校　阿　孫　裕　司　27

５　分科会の成果と課題　28

執筆を担当したのは、令和元年度大分県公立学校教頭会研究部員、事務局員及び会員です。

１　Ａ	重　石　智　慎
１　Ｂ	和　田　　巧
２　Ａ	髙　野　雄　一
２　Ｂ	鶴　成　智　章
３　Ａ	若　林　美奈子
３　Ｂ	竹　中　恵　子
４　Ａ	御手洗　徳　尚
４　Ｂ	穴　井　信　義
５　Ａ	植　木　龍　典
５　Ｂ	古　庄　利史郎

研究主題

「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」
キーワード　〈自立・協働・創造〉

趣　旨　全国及び九州地区公立学校教頭会共通の第11期研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」キーワード〈自立・協働・創造〉を受け、本県における教育課題とのかかわりの中で、変革期の教育のあり方やそれを創造する教頭のあり方を究明し、教育課題解決への最善の方途を探求する。

１　期　　日　　令和元年８月９日（金）

２　日　　程

［全体会］　　佐伯文化会館

９：00～９：20　　受　　付

９：30～10：00　　開会行事

10：10～11：40　　記念講演

〈講 師〉柴　田　真　佑　氏

佐伯市役所地域振興部まちづくり推進課総括主幹

〈演 題〉「命を守る……食育と減災の心

～被災地の教訓を学びに生かす～」

11：40～13：00　　移動・昼食・休憩

大分県立佐伯鶴城高等学校

※12：40～13：00　　分科会事前打合せ会

13：10～16：20　　分科会（閉会行事を含む）

第52回大分県公立学校教頭会研究大会佐伯大会　分科会担当一覧

課題	分科会	研究主題	種別	提言者			司会者	
				郡市	学校	氏名	学校	氏名
1	A	教育課程に関する課題	小	豊後高田市	臼野小	旦部東子	真玉小	財前大成
			小	宇佐市	佐田小	田口正宜	院内北部小	早田淳一
	B		小	由布市	西庄内小	水島裕視	挾間小	和田　巧
			中	別府市	中部中	末光淳二	鶴見台中	大塚史朗
2	A	子どもの発達に関する課題	小	大分市	丹生小	友成利光	小佐井小	光根昌俊
			中	大分市	城東中	吉松重成	大東中	東　克彦
	B		小	日田市	三和小	楢原公徳	三芳小	江藤浩二
			中	日田市	東部中	三笘淳一	南部中	齊藤辰也
3	A	教育環境整備に関する課題	小	中津市	上津小	松田昌夫	城井小	川野和弘
			中	中津市	山国中	岸原　宏	三郷小	井上浩一
	B		小	大分市	寒田小	宮本高生	稙田小	古長史哉
			中	臼杵市	野津中	山上裕二	北　中	武宮武雄
4	A	組織・運営に関する課題	小	佐伯市	蒲江翔南学園(小)	吉田　浩	松浦小	後藤孝司
			中	佐伯市	直川中	市川　満	宇目緑豊中	石川文男
	B		小	杵築市	山香中	小野誠司	東　小	相部俊郎
			中	速見郡	日出中	藤原　健	大神中	本庄徳彦
5	A	教職員の専門性に関する課題	小	大分市	滝尾小	長野尊弘	森岡小	正尾和幸
			中	大分市	竹中中	志田やよい	佐賀関中	薬師寺　卓
	B		小	豊後大野市	朝地小	佐々木直子	緒方小	渡辺竜也
			中	竹田市	緑ヶ丘中	阿孫裕司	都野中	伊東伸一郎

研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」
キーワード〈 自立・協働・創造 〉

記録者		指導助言者		運営委員		参加数	分科会場
学校	氏名	所属	職・氏名	学校	氏名		
桂陽小	河野邦子	和間小	校長 天野文代	東雲小	植田富美代	38	1－1 2F
和間小	三浦知治						
挾間中	甲斐浩	山の手中	校長 財前昭仁	鶴岡小	牧野裕光	35	1－2 2F
朝日中	工藤和典						
鶴崎小	徳光秀敏	森岡小	校長 中村斉	青山小	若林良造	38	選択教室7 2F
賀来(小)中	金子正康						
東有田中	小林祐志	南部中	校長 吉田英喜	宇目緑豊小	長野敬之	36	2－1 2F
大山小	小石克彦						
小楠小	花崎淳	秣小	校長 八丁誠一	佐伯東小	竹井英三郎	39	選択教室6 3F
耶馬溪中	赤野謙一郎						
横瀬西小	井尾雅子	東中	校長 山田晃世	米水津中	森脇康	37	2－5 2F
下南小	大平高広						
直川小	梶原秀雄	佐伯東小	校長 川上修司	米水津小	野々下徹	38	1－3 1F
昭和中	赤峰武壽						
北杵築小	中島純子	大神中	校長 林東洋一	鶴谷中	川野匡	34	1－4 1F
大神小	安部恵						
明野北小	長木憲明	日岡小	校長 幸俊一	東雲中	髙橋浩二	34	選択教室8 1F
判田中	望月美貴						
千歳小	岩下千保美	緑ヶ丘中	校長 河野義文	佐伯城南中	中濱和也	35	1－5 1F
荻小	加藤陽一						

令和元年度　第52回大分県公立学校教頭会研究大会佐伯大会記念講演

いのちを守る　…食育と減災の心
～被災地の教訓を学びに生かす～

佐伯市役所地域振興部まちづくり推進課　　柴　田　真　佑　氏

１　はじめに

沖縄県が実は日本の未来の縮図だっていうふうに言われています。沖縄では今、「さかさぼとけ」っていう現象が起きてます。沖縄県のですよ、平均寿命ずーっと下がり続けてて。80歳、90歳、100歳のオジィ、オバァたちは元気いいんですよ。でもなんで平均寿命はどんどん下がってんのか。それはオジィ、オバァたちの娘や息子、なんならその孫たちがバッタバッタと倒れて、今、亡くなってると。「さかさぼとけ」っていうのは80、100のオジィ、オバァたちが自分の息子や娘そして孫たちの葬式を出してるっていうことなんです。その原因がはっきりしてます。これは完全に食の欧米化。一番最初に欧米の食文化が、一斉に入ってきたのが沖縄です。オジィ、オバァたちの息子、娘たち、そして今の子どもたちがその欧米化の流れの中で高脂血症であるとか、肥満であるとか、糖尿病そういうものでバタバタ体調崩してるという。沖縄の家庭には「荒れ」も多く見られています。食育も栄養バランスのことだけじゃなくて心を育てていく食育もあるんだよって、だからこそ、家をそして、家庭環境を、暮らしを整えていくことやっていきましょうねっていうことをですね沖縄県は推めています。

２　「いただきます」「ごちそうさま」

食育と防災ってなんでつながるんやろうかっていう風に思われる方も居ると思うんですが。私は東北の被災地にもう31回行ってるんですよね。「せめて給食だけでも食べていってください。」みたいな感じで、子どもと一緒に給食を食べます。そういう時にですね、僕は今から４年ほど前ですか、講演会が終わって、教室の中で子どもたちと一緒に、給食を食べました。そしたら、中学１年生の女の子、ものすごく食べっぷりがいいんですよ。その女の子に僕は聞きました。「食べっぷりがいいね。食べ残しとかさぁ、しないでしょ」「しません」「へぇ。好き嫌いとか無いの？」って言ったら、「昔はありました」って言うんですね。「昔はあったって、あなた中学１年生でしょ。昔っていつよ」っていう話をその子としてました。そしたら、その右に座ってた男の子、こんなガタイのいい男の子、ガツガツ食べるんですね。「おまえ、食べっぷりいいね。やっぱり好き嫌い無いでしょ」って言ったら、「昔はありましたけど、今はありません」「中学１年で昔っていつよって、だから」そしたらその子がポロッと言ったんですよ。「３・11の前」って言ったんですよ。

結局、あの３．11の被災をする前までは、給食を食べ残してたって言うんですよ。そしたら、その話を横で聞いてた担任の先生が、僕のとこに近寄ってきて、「柴田さん、実はですねって」言って、話をしてくれました。「実はこういうことなんですよ」３．11のあと、給食センターもその地域は流されました。２、３年経って仮設の校舎ではあるけれども、給食だけは何とか復旧した。その時に「うわーっ」てみんな喜んだそうです。給食復活ってみんなで喜びながら配膳をして、そ

して「いただきまーす」って言って食べ始めた。ところがですね、食べ始めてすぐに、ある一人の女の子が、献立のおかずがですね、肉じゃがだったそうです。その肉じゃがの中に入ってた人参、それを見て、「あぁ、もうヒロミはいないんだ」箸を持ったまま固まっちゃった。その子の親友のヒロミちゃん、幼馴染です。ちっちゃい時からずっと一緒に育ってきて、実はその子は人参が苦手だったんです。だから、そうヒロミちゃんっていう子はその子が人参嫌い、要は苦手なの知ってるから、「私が食べてあげるわ」って言って、いつも先生の目を盗んでは、「私によこしな」とか言って、給食の人参をそのヒロミちゃんは食べてくれてたそうなんです。でもそのヒロミちゃんは津波で流されて、行方不明になってました。で、「もうヒロミはいないんだ。もうこの人参を食べてくれるヒロミ、もういない。まだ見つかっていないから。」ってことをぽろっと言ったんです。給食復活してみんな喜んでたのに、亡くなったクラスメイトのことを思うと、なかなか箸が進まず、固まってたそうです。で、その様子を見た担任の先生が、一言、その子たちのところに寄ってきて、こう言ったそうです。「食べてあげようね。もう食べることができない、生きることができないあの子たちの分まで食べて食べて生きてあげようね。」そういう一言だけポツっと言ったそうです。その言葉を聞いて、そのクラスの学級委員長が、「よし、もう一回いただきますを言い直そう。」って言って、みんなでいただきますを言い直して、そして、復活したその日のその時の給食は、みんなで泣きながら完食したそうです。その日から、そのクラスでは食べ残しが全く無くなり、そして、その波及は学校全体に及んでその学校では、食べ残しが無くなった。先生や親が食べ残すな、なんて一言も言ってないんですよ。要は東日本大震災の現場を生き抜いて、命の尊さ、いただきますの意味、これを自分たちなりに理解した子どもたちならではの、これは「生きる力」だという風に思ってます。僕が軽はずみに、いただきますとごちそうさまの意味、ちゃんと思いながら、本気で言いながら食べなよ、みたいなことを言ってた自分が恥ずかしくなりました。その話を聞いた後、その子たちが給食を食べ終わって、「ごちそうさまでした」っていう姿を見ると、たまらなくなりました。「ごちそうさまでした」って言った時に、この食材とか作ってくれた人への感謝、食材を育ててくれた人への感謝、この食材の命そのものへの感謝、だけじゃなくて、これをまた食べたよ、明日から僕ら私たち、また生きていけるよっていう、多分、亡くなったクラスメイトへの誓い、そういったものを心に秘めながら、東北のあの震災を経験した子どもたちは暮らしています。

３　こころを開くために（傾聴）

誰が来ても、心を閉ざしちゃうって子どもたちが沢山います。子どもたちと接するときに一番大事なこと、それはですね、目線を合わせるっていう、まずここからなんです。目線を合わせるだけじゃ、まだ足りないんですよ。目線をもっと子どもたちから見下ろしてもらうんですよ。目線をまず合わせて、そのあと、首をね、こうするんです。首をちょっと傾けてあげるんですよ。笑みを出すときに、この首、この首をどっちかね、皆さん傾けてみてください。あの、気持ちいい方向に。皆さん方は教頭先生方ですから、「どうした。悩みでもあるか？」っていうようなときに、そんな時に僕らも使うんですけど、「どうしたよ？最近ちょっと元気ねぇやねぇか」って、目線下げてあげるですよ。まずはその目線合わせて、そのあと、聞きながら、「どうした？何でも言ってくれよ」って目線を斜めにすると、自ずと目線が僕の方が下がる訳ですよ。だから、それを利用すると同時に、この首をフッてすることで、相手は敵じゃないって、包まれてる柔らかい感じがするっていうイメージになる。話をするときに、どんどん話を進めていくんですが、大事なのは結局、近づ

いて、最後、話をしてくれるようになります。してくれるようになった時に、うなずく。さっきの首を良く動かすってことですよ。うなずくっていうのがものすごく大事だっていう風に言われてます。

４　東北で出会った少年

その子は小学校１年生の時に被災をしたんです。その後、５年生になった男の子が書いた『３．11のこと』という作文です。この作文は、実はやっぱり、あの３．11を振り返らしちゃいけないっていう大人たちの配慮、そして学校の先生方もほとんどがそうだったらしいです。だけども、ある学校の先生が、いやぁ、そりゃもう違うんじゃないかなぁ。いくら辛い経験、悲しい経験をしたって言っても、自分のその過去に、ずっといつまでも目を伏せたまんま、ふたをしたまんま、夢や未来を追いかけることはできないでしょう。やっぱり、辛かったことは辛かったこととして、一度しっかり心の中に落とし込んでから、夢に向かって、よし、でも進んでいくっていう、それこそが前に進むってことじゃないかなっていうことを提案したそうです。実はその先生は、自分の奥さんと、子どもさんを津波で失っていました。学校でもかなり議論があったそうです。だから、書ける子だけでいいと。書ける子だけでいいから、書ける子は一度書いてみようか。そういうことを伝えて、そして先生たちみんなでケアをするっていうことを約束して、その作文を書いたそうです。小学１年の時に被災をして、５年生になってその作文を書いた男の子の作文、『３．11のこと』、紹介したいと思います。

神様、お願いがあります。僕には後悔してることがあるんです。だから、時計の針を戻すことはできないでしょうか。もし、時計の針を戻すことができるのなら、僕はまず、2011年３月10日の夜に戻してほしいです。あの夜、あまりにも勉強しない僕に向かって、おじいちゃんがこう言いました。「お前、少しは勉強せんか！」そういってくれたおじいちゃん向かって、僕は言いました。
「うるせぇ、くそじじい。」

神様お願いします。時計の針を戻してください。もし時計の針を戻すことができるのなら、僕は2011年３月11日の朝にも戻してほしいです。あの朝、温かい朝ごはんを差し出しながら、
「あんた、少しは食べて行かんね。」そう言ってくれたお母さんに向かって僕は言いました。
「そんなまずいみそ汁喰えるか」

結局、その日おじいちゃんと、お母さんは津波に飲み込まれ、いまだに帰ってきていません。僕をちっちゃい時から、ずっと可愛がってくれたおじいちゃんに最後に言った一言が、「うるせぇ、くそじじぃ。」だったんです。僕を生んでくれて、愛して愛して愛し続けてくれたお母さんに最後に言った一言が、「そんなまずいみそ汁喰えるか」だったんです。

神様お願いします。時計の針を戻してください。もし時計の針を戻すことができるのなら、2011年３月10日の夜、おじいちゃんにはこう言ってあげたいです。「おじいちゃん、ありがとう。勉強するよ。おじいちゃんも長生きしてね。おじいちゃん、ありがとう。おじいちゃん、ありがとう。」もし時計の針を戻すことができるのなら、2011年３月11日の朝、お母さんにはこう言ってあげたいです。「お母さん、いただきます。おいしかったぁ。ごちそうさま。」

僕は、おじいちゃんとお母さんに言わなければならなかったのに、言うことができなかった、「ありがとう」「いただきます」「ごちそうさま」この、人や、命に感謝する素敵な言葉をこれか

らの人生でちゃんと使っていけるような大人になりたいと思います。

という作文でした。最後は、僕の隣で、ヒックヒックって肩を震わせながら泣きじゃくりながら、それでも一生懸命僕に伝えてくれました。その子が僕に作文を聞かせてくれて、「ありがとな、ありがとな。」って僕はお礼を言うしかなかったです。

その子はあの津波、震災でおじいちゃんとお母さんを亡くしてた。兄弟はいなかったそうです。お父さんと二人暮らしだった。その子よりもお父さんの方が心に痛みを負ってて、実は心にダメージを負ってるのが強くて、自分のおやじと、そして、自分の奥さんを亡くして、その喪失感に打ち勝てなかったのは、そのお父さんの方で、実は小学校４年生の半ばくらいから、そのお父さんのその不安感は、その男の子に向いたそうです。結局、お父さんが虐待を始めてたんですよ。虐待を受け始めて中学１年生の夏休みまで頑張ったんです。でも、９月になり、絶望的な感じになったんでしょうねぇ。自ら命を絶ったって、そういう話なんです。そう考えると、今皆さん方に紹介した、あの子から聞いた作文、あれを聞いたのは小学校５年生の時ですよ。僕はあの時の自分に帰れる、もし帰れるんならば、自分自身をぶん殴ってやりたいですよ。あの、最後の涙ながらに語ってくれたあの子、あの涙の意味、ただ単に、じいちゃんと母ちゃんに誓いをしてた、でも頑張って生きるぞって、歯を食いしばって生きるぞって。その誓いの涙だと思ってたんです。でもそれだけじゃなかった。こんなに頑張って、「いただきます」「ごちそうさま」「ありがとう」をしっかり心から言える大人になろうと頑張って生きようとしてるのに、お父さんなんで打つんだよ、お父さんなんで叩くんだよって、その涙だったようにも思います。それに気が付いてあげれなかった自分が不甲斐なくて不甲斐なくて、ほんと情けなくて。その子のお墓参りしたときに、顔があげられませんでした。

５　おわりに

食育も防災も命にかかわることじゃないですか。自分の命を守るために防災があります。減災の活動があります。食育があります。命を育んで、守るためにあるんですよ。だから僕は、この防災と、そして食育を一緒にかみ合わせながら、これからも活動していきたいというふうに思ってます。

最後に、いつも食育で僕らが学校の先生に対しての講演っていうよりは、学校の先生向けの講演もするんですが、子どもたちに向けて講演する時も、実は保護者に向けて講演をするようにしています。その食育講演の中で、この子どもたちにたくましく育ってほしいなっていう思いをこめてやってるのが、『暮らし力』です。この防災も、要はいつも命を守るっていう意味で、『防災力』とも言いますが、暮らしていくための力、そして、自分が独り立ちできる力、要は一人になっても自分たちでご飯が炊ける、おかずが作れるとか、そういうたくましい、そして食材を優しく扱えるような、命としっかり向き合えるような子どもたちを育んでいきたいなっていう事を思っています。防災と、食育っていうのは心を育てたり、そして思いやりを持つこと、これを僕らは根付かせるために、ものすごく有効な手段だと思っています。子どもたちを通して、実は僕らは親に向かって言ってます。そして、親に向かって子どもたちに言ってます。今日はですね、皆さん方最後までですね、真剣なまなざしで見つめていただいて、本当にありがとうございました。心から感謝です。ご清聴ありがとうございました。

第１Ａ（小）分科会　教育課程に関する課題

提案主題　学校・家庭・地域が互いにＷＩＮ－ＷＩＮの関係になる
　　教育課程を編成するにあたっての教頭としての役割
協議の柱　教頭として、学校の規模に合わせ、地域とつながるためのリーダーシップは
　　どうあればよいか

提言者　豊後高田市立臼野小学校　　旦　部　東　子

1　質　　疑

⑴　Ｑ　先生の姿を見て、他の先生の心に変化が見られた。その部分をもう少し詳しく。
　　Ａ　活動の中で新しいことをプラスαでやってほしい。日々の声かけや会話の中でそういう気持ちになってもらえるよう努力をしている。

⑵　Ｑ　事務職員の未配置校であるが、校務等の補佐はしてくれているのか。
　　Ａ　補佐はほとんどない。担任をしているので、子どもたちが下校するまでは教室にいることがほとんど。下校後、教頭の仕事をこなしている。

⑶　Ｑ　小規模校ということでのコミュニティースクールと統廃合について。
　　Ａ　１年目は廃校の危機を感じた。地域の方にも助けてもらいたい所はたくさんあるので学校運営協議会の内容も工夫しながら行っている。

2　協　　議

⑴　小規模校・大規模校それぞれに苦労がある。小規模校はどうベクトルを合わせていくのかが課題。単年ではなく、系統的につながっていく行事をやっていくことが、より地域とつながる学校づくりへ向かうことになる。学校に近い存在の方々とどうつながるかも大切である。大規模校は安定した活動はしっかりできているが、新しい活動を入れていくのが難しい。

⑵　地域を知って、その人材をどういう形でカリキュラムに入れて実践していくのか。
その他にＳＡ（スクールアシスタント）が授業に入っている学校もある。

⑶　地域の方々には体験活動等でお世話になっている。職員にとって負担になっていることもあるかもしれないが、子どもたちにとっては有効であるものは積極的に取り入れるべきである。地域の方の思いと教職員の思いをつなぐのも教頭としての役割である。

⑷　地域の協力とカリキュラムの目標の連動がなされているのかの見極めも教頭としての役割ではないか。

3　指導助言

⑴　地域の人・もの・ことを活用した活動が地域とつながる力となっている。それが教育目標と合致し、育成すべき資質能力が育まれるというＰＤＣＡサイクルが成立している。

⑵　小規模校では特に「チームとしての役割」、「リーダーとしての役割」をどこまで意識してやれるかが難しい。しかし人が少ないからこそ職員が連携すること、地域の力を最大限に生かすことが求められる。

第１Ａ（小）分科会　教育課程に関する課題

提案主題　地域との連携やカリキュラムマネジメントにおける教頭の役割
協議の柱　地域との連携やカリキュラムマネジメントに教頭としてどのように取り組めばよいか

提言者　宇佐市立佐田小学校　　田　口　正　宣

1　質　　疑

⑴　Ｑ　学級の問題を学校の問題にしていくときどのように話題にしていったのか。
　　Ａ　職員会議、情報交換、子どもの状況等で話題にしていたが、保護者を含め他人事になっていた現実があった。まず学級の実態を目の当たりにし「自分自身にできることは何があるのか」と考え実態の共有化と指導のベクトル（一人１分担、教科や休み時間の見守り等、職員みんなでクラスに関わる取り組み）が揃って取り組めた。

⑵　Ｑ　学級が荒れ始めた時、他の先生も複眼的に見ることはなかったのか。
　　Ａ　低学年時より落ち着きのない傾向にあった。運動会後Ｔ２も教室に入り様子を見てきた。不登校いじめの問題等気を付けなければならない課題として受け止めていた。

2　協　　議

⑴　地域との連携を大切にする中で、行事や活動を充実させながらも精選に取り組む必要がある。精選することで放課後の時間を確保することや時間を生み出す為のマネジメントが教頭に必要である。

⑵　教頭として教育課程の学年系統の全体を把握する。ＣＳ担当は人材バンクの活用がいつでもできるようにしておく。また見直しもすぐにでき、異動があってもすぐに職員が活用できるものにしておく。教頭は地域と繋がり、地域の願いを受け止めたうえで教育課程のねらいとのすり合わせが必要である。

⑶　学校での困りがあった時に担任だけが抱えるのではなく支援員・管理職・ＳＣ・ＳＳＷ等の教職員を活用し、更には地域・事務所・学校運営協議会・まちづくり協議会（ＣＳ）等のサポートを受け負のスパイラルを断ち切ることが大事である。

3　指導助言

⑴　教頭として「場の設定」や「組織の見直し」「課題を双方で共有」することで学校側と地域が意見のすり合わせ、事後の見取り、次年度への引継ぎができる。また地域連携の必要性を職員に感じさせることが教頭の使命の一つである。教頭の指導性が問われる部分であり、難しい部分である。

⑵　支援が必要な児童に対して共通理解することは言うまでもない。支援会議、運営委員会職員会議等の組織的な取り組みが成果を上げている。教務が中心となる部分や複数体制支援、縦割り班の活用、関係機関との連携等「チーム学校」として取り組みが大事。

⑶　小中高一貫教育「地球未来化」の実践を行う中で、「ひと」「もの」「こと」を活かし、人材リストの作成やカリキュラムデザインの責任者等組織が出来上がれば組織として運営できる。教師の指導力や組織力も人的資源と捉え活用することが大切である。

⑷　教頭は、校内組織の再編や部署の新規創出、役割分担の明確化や日程調整等を最初にやっておく必要がある。そしてリーダーを育てることが教頭としての役割である。

第１Ｂ（小）分科会　教育課程に関する課題

提案主題　地域と連携し、地域のよさを学ぶ教育活動の充実と実践
サブテーマ　―最後の一年を充実したものにするための教頭の役割―
協議の柱　教頭として、地域と連携した教育活動を仕組むためのカリキュラムマネジメントをどう推進すればよいか。

提言者　由布市立西庄内小学校　　水　島　裕　視

1　質　　疑

⑴　Ｑ　閉校に伴い、在校生は３つの小学校に分かれると言うことだが、どの位の規模の学校か。
　　Ａ　１人～80名規模、３人～70名規模、２人～114名
⑵　Ｑ　通学する学校が替わって、保護者の参画意識は変化したか。
　　Ａ　新しい学校に替わっても、加勢したいという意識は持っている。どう加勢したらいいかという相談の電話がかかってくる。
⑶　Ａ　学校運営協議会との関係で、委員に「完全に任せる」ということは、教育課程上無理なのではないか。
　　Ｑ　１年間の教育課程の中で、どのような部分なら学校運営協議会委員に加勢してもらえるのかを考慮している。具体的には、日時・準備物・当日の運営等である。

2　協　　議

⑴　地域と連携するという場合の「地域」は、大規模校であれば、自治委員や民生委員等が考えられ、小規模校であれば育友会など全地域・住民、保護者等が考えられる。
　活動を行う際に、どんな子どもに育てたいのか・ゴールをどうするのかという目的・目標を焦点化していくことが大事である。
⑵　地域と連携した教育活動を行う場合、校種・規模等によってシチュエーションが違ってくる。校区が広いと浸透しにくいことがあり、狭いと密着しすぎるので学校と地域との関係を考慮する必要がある。総合的な学習を行う時は、単元プランの組み方や、学年に応じた地域の活用法・合科的にどう進めるかといったことが課題である。
⑶　少人数の児童の場合の実践であり、今後の計画や指導の在り方に役立った。ＰＴＡ・地域の様子は各校で違うので、意識改革を進めていくことや教頭だけでなく、ＰＴＡからの提案等もお願いする。校務支援システムを活用して、年度当初の引き継ぎをスムーズに行い、データやフォルダを管理して、カリキュラムマネジメントを行っていく。

3　指導助言

⑴　「総合的な学習の時間」の導入や「特色ある学校づくり」の推進により、学校と校長の裁量権が増え、学校に自由にカリキュラムマネジメントができるようになった。
⑵　教育資源として「もの」・「かね」・「ひと」・「時間」・「情報」等がある中で、「ひと」が一番活かす可能性がある。その人の力を上げることによって実績を上げることができる（人材育成）。そして成果を地域に戻すことが必要である。
⑶　閉校式はゴールではなくツールであり、閉校式を経験して、新しい学校のいいところ探しをすることで「他者理解」につながり、様々な発表等を通じて表現力が身につく。
⑷　どう推進するのかではなく、どうしたいのかを明確にして、学校と学校運営協議会とが共有し、学校運営協議会委員をどの位置・どんな役割を担ってもらうかを学校側が決めて、地域と連携した教育活動を仕組んでいく。そして、学校が主体となってカリキュラムマネジメントを行っていく。

第１Ｂ（中）分科会　教育課程に関する課題

提案主題　指導者自身による授業時数と授業進度の管理
協議の柱　『授業時数と授業進度の適切な管理』について、各校における現状と取組、及び教頭の役割

提言者　別府市立中部中学校　　末　光　淳　二

1　質　　疑

⑴　Ｑ　特別支援学級と交流学級との授業の兼ね合いで、どの学校も日課表づくりに苦労しているが、実際に出張者や急な年休者があった場合、（完全な教科担任制の）中学校ではどう対応しているのか。

Ａ　実際には、このようなケースが多く、急な授業変更は学年主任が学年ごとに行っている。授業時数に偏りが生じないよう年度当初に共通理解している。

⑵　Ｑ　自校では、情緒障がいと知的障がいの別によって特別支援学級を編成している。提言者の学校では学級編成において、どのような手立てをとっているのか。

Ａ　年度当初、生徒同士の関係で同一学級にできないケースがあり、障がいの別だけでの学級編成ではなく、生徒同士の関係性・生徒指導に配慮した編成を行った。

2　協　　議　（Ｄ・Ｅ・Ｆグループの討議報告より）

⑴　学校規模によって日課表編成は様々であり、県教育委員会「中学校学力向上対策３つの提言」の中での「学校規模に応じた教科指導力の仕組の構築」における「タテ持ち」を実施すると、日課表編成は複雑になるが、学年内の同一教科担当を複数にすることで、相互の授業内容・進度においてチェック機能が働く。

⑵　急な授業変更の場合、小学校では教頭が自習監督やプリントによる授業を行うことが多い。その場合、内容によっては授業時間としてカウントする。グループ討議で小･中学校とも「自習」をつくらず、授業の振替を行う取組はほぼ定着している。

⑶　職員室内に全学級の日課表を一覧できる掲示板を設置し、出張等による授業の「空き」を可視化できるようにしている。

⑷　道徳の授業は、学年内の教員がローテーションを組んで行っている。これは道徳の授業時数の確保には有効であり、学級間の統一した計画的指導に効果的であった。

3　指導助言

⑴　授業時数の確保は日々の日課表の調整に加えて、大胆な発想が必要となる。例えば土曜授業、長期休業中における授業日の設定などもその一つである。

⑵　授業時数の確保と併せて重要なのは「授業の質」である。単元プランを考える際「どんな力をつけさせるか」を指導者自身が明確にし、その意図で授業を展開する教師の力も必要である。一つの教科で完結を目指すのではなく教科横断的実践が重要である。

⑶　働き方改革も、教職員の自己管理を含めた資質の向上なくしては実現できない。

⑷　小学校では５年、中学校では 10 年の間に１／３の教職員が入れ替わる。新たに入ってくる教職員が学校・学年全体を見渡せるように育成することも大切な課題である。

第２Ａ（小）分科会　子どもの発達に関する課題

提案主題　特別な支援を必要とする児童への組織的な対応について
サブテーマ　校内の体制づくりと関係機関との連携に向けた教頭の役割
協議の柱　特別な支援を必要とする児童へ組織的な対応を行うために、
教頭の役割はどうあればよいか。

提言者　大分市立丹生小学校　　友　成　利　光

1　質　　疑

⑴　Ｑ　178 名の在籍のうち、特別な支援を要する児童は何名いるか。個別の支援カードは何人分あるか。補助教員や支援員は何人位いるのか。

Ａ　13 名。支援学級の５名分については全員あるが、その他はＡ児のみ。これから作る予定。支援計画は、その都度作成している。

Ｑ　保護者の理解を得たり、職員の見方や考え方をそろえたりするにはどうすればよいか。

Ａ　子どもの思いをこちらに向けることで保護者もこちらを向いてくれる。そのためにもＡ児を押さえ込むことはせずに、安定するまでの時間を確保することにした。職員は「誰が何をする」という役割を決め、色んな目で見た内容を集約していくと、更に多くの事が見え、対応がしやすくなっていった。

Ｑ　ＳＳＷとの兼ね合いは？校内対策委員会の機能の仕方は？

Ａ　ＳＳＷを組織に入れている。発達障がいについては特別支援教育推進委員会を実施している。

2　協　　議

⑴　組織的な対応を行うために教職員をつないでいくのは教頭の役割である。公務システム等に入力していき、ＳＳＷ・ＳＣや関係職員がいつでも見て情報を得られるようにしておくという方法もあるのではないか。

⑵　設定された会議の参加メンバーや人数を、事象によって変えることで効率よく話を進められる。出席した会議について教頭がプラス評価を行い、次につなげていく。

3　指導助言

⑴　職員室の担任として職員室が明るく協力的であたたかい雰囲気に包まれるよう努力してほしい。子どもが抱えている困難さに気づくことが支援の始まりである。そのためには、学校全体で子どもを見守る体制をつくることが重要である。それが校内支援体制づくりの基盤となる。このことをしっかりと職員に啓発してほしい。

⑵　子どもの諸問題に関する話し合いの場を定期的に設けてほしい。その際、校内の会議や各種検討委員会の在り方を見直し、整理統合を進めていくことが重要である。また、校長と連携しながらコーディネーター等の仕事を支援していくことが教頭の役割と考える。このような働き方改革の推進者としての役目を果たすことも教頭に与えられた使命であると考える。

⑶　ＳＣとＳＳＷの役割分担を理解し状況に応じて活用できるよう配慮してほしい。また、今をどうするかに目が行きがちになるが長期的展望視点をもたせることも教頭の役割である。

第２Ａ（中）分科会　子どもの発達に関する課題

提案主題　子どもの見方とらえ方の変革を求めて
サブテーマ　―ユニバーサルデザイン授業の深化を通して―
協議の柱　ユニバーサルデザイン授業の深化を、教頭としてどう進めていくか。

提言者　大分市立城東中学校　　吉　松　重　成

1　質　　疑

⑴　Ｑ　H30年度のアンケートを見ると、１年生５月の数値が低いが、小中連携がどのように行われているか。

Ａ　中学校区（３小学校）で、　年２回（夏・秋）実施している。カードの色等を小中で統一することを検討している。

Ｑ　ＵＤ授業の深化において、研究主任と教頭で明確な役割分担があるか。

Ａ　校内研究では、研究主任が読解力をつけることを重点目標にして進め、教頭は全体を通して、気が付いた点を主任に示すことで分担はできていると思う。

2　協　　議

⑴　新規不登校の生徒数が減少していることが、大きな成果ではないか。ＵＤ授業の「形」を整えるだけでなく、深化をより焦点化していくことで授業改善につながっていることが理解できた。

⑵　校内研究での指導案の中に、困りのある生徒の支援をどのようにしていくか、○○さんに焦点化することもあっても良い。校内研究を進めていく中で、教頭は研究主任と綿密な打合せが必要。そのためにも日頃の授業観察が大切である。

⑶　教頭は、研究主任の良き理解者になるべきである。先輩として、人材育成の視点で情報発信をすることが大切。例えば、良い授業の板書を写真に撮り、フォルダに入れていつでも見ることができるようにするなど。

3　指導助言

⑴　授業のＵＤ化は、学習面において配慮を要する生徒にとっては『ないと困る』支援であり、どの生徒にも『あると便利な』支援を増やすことになります。この支援の広がりがやがて「授業改善」へと結び付き、さらには「進路・学力保障」に通じます。すべての取組は学校経営の基盤である「人権・同和教育」の推進につながっています。

⑵　職員室の担任として、気配り、目配り、心配りを大切にし、ご自身の体調管理に十分留意しながら、明るく居心地のよい職員室づくりを進めてください。

⑶　校長との良好な関係性を保ちつつ、校長を補佐する立場として、時には校長に進言できるよう力量を高める努力をしてください。皆様方のご活躍を期待しています。

第２Ｂ（小）分科会　子どもの発達に関する課題

提案主題　子どもの実態に応じた組織的な支援と教頭の役割について
サブテーマ　―組織的な支援を行うための校内体制づくりをどのように進めていったか―
協議の柱　子どもの実態に応じた組織的な支援と、教頭の役割はどうあればよいか。

提言者　日田市立三和小学校　　楢　原　公　徳

1　質　　疑

⑴　Ｑ　ＳＣとＳＳＷの連携をどうしているか。
　　Ａ　ＳＣが週１回の半日、ＳＳＷは数か月に１回の来校のためあまり交流がない。今年度はＳＣとＳＳＷが参加する拡大ケース会議を１回実施できた。現在は市のこども未来課が主に請け負っている状況である。
⑵　Ｑ　特別支援コーディネーターや教育相談コーディネーターのかかわりをどうしているか。
　　Ａ　保護者からの相談は主幹教諭が窓口になっている。いじめや不登校関係など子どもの困りの内容に応じて役割分担をしている。
⑶　Ｑ　養護教諭のかかわりをどうしているか。
　　Ａ　不登校や特別支援のケース会議に参加している。養護教諭は保護者にも積極的にアプローチしている。保健室と担任との情報共有を密にしており学級経営に生かせている。

2　協　　議

⑴　特別な支援を要する児童生徒については運営委員会で情報交換をしている。教頭の役割としてはケース会議等の日程調整。ＳＣやＳＳＷとの連携についてはうまく活用できていない現状がある。ケース会議をとおして保護者とのつながりを持っている。会議後、役割分担を明確にするもの教頭の役割。
⑵　大規模校、小規模校それぞれに支援の必要な児童生徒が多い。学級担任だけでなく特別支援コーディネーターなど専門的な指導ができる職員が積極的に動くことによって、また管理職も含めて保護者に働きかけることによって子どもたちが少しずつ変わっていけるのではないか。また主要主任が中心になって、保護者の気持ちを受け止めながら、ケース会議等を通じて子どもにとって一番いい支援とは何かを具体化して、共通理解をして指導にあたることが必要ではないか。
⑶　実態に応じて、すべての教科やいろんな側面からアプローチしていくように教頭が声かけをして、その後の意見を集約してまた生かしていくことが大事。特別支援コーディネーターをうまく活用してはどうか。また支援員からの意見を聞き、対応していくことも必要。外部機関との連携についてはためらわずに連絡を取りながらケース会議等の開催につなげていくことが教頭の役割として大切。

3　指導助言

子どもの実態に応じた支援そして組織的な対応、当たり前のことをここに挙げてそれがなお大事だということや当たり前のことをより丁寧にやっていきましょうという発表であった。楢原先生の学校では各種組織的な対応のための会議を立ち上げて、子どもの支援にあたる体制を整えていた。どの先生が何を担うのか、采配を振るうのも教頭の頭を痛めるところだが、まずは職場全体の意識を高めていくことに汗をかいていただきたい。そうすることで、その分掌・役割を担った先生の仕事もうまく回るし、みんなの先生で関わって、それを担当する先生がまとめ上げていくことで、働き方改革にもつながっていくだろう。職員のみなさん全体の意識を引き上げていきながら、それを担った先生が上手にその仕事をこなしていけるようになるとよいのではないか。

不登校問題を発達に関する課題とかぶせてみたときに「10才の壁」に突き当たる。今回の実例と「10才の壁」を重ねてみた時にどこかで何かの要因が見えてくるかもしれない。そういった振り返りもしながら、教頭には部下職員に対して“回復より予防”の対応ができるような采配を振るっていただきたい。

第２Ｂ（中）分科会　子どもの発達に関する課題

提案主題　防災意識を高め、命を守る取り組み
サブテーマ　―防災・減災教育の充実を図るための教頭の役割―
協議の柱　防災意識を高め、命を守る行動がとれる生徒を育成するために教頭が果たす役割

提言者　日田市立東部中学校　　三　笘　淳　一

1　質　　疑

⑴　・避難訓練の想定は変わるが、毎年同じになりがち。どのように意識を高めるか。
　・防災教育コーディネーターの意識改革を促し、組織として対応する力が大切。
　・防災アドバイザーの招聘はどのようにすればよいのか。
　・県に申込みをすれば、来校して防災関係の指導・助言等を行ってくれる。

2　協　　議

⑴　教頭として、防災教育コーディネーター等と連携して学校全体で取り組み、子どもの発達段階に応じた指導を行って防災意識を育てることが大切。予告なし、予告ありなど、パニックを起こさないための工夫も必要。

⑵　教頭や担当が変わった後も継続して取り組んでいくためには、絶えずマニュアルを加筆修正を加えていくこと。また、教頭の引継ぎ時に伝えることを忘れない。

⑶　コミュニティスクールで地域の防災教育をどのように進めていくのかが課題。地域の一員として、子どもたちの関わりや地域や行政との連携の在り方。（消防団、避難所）また、地域防災士との協力など。

⑷　中学生が地域の高齢者の避難を手伝うことや、避難所で出来ることを模索。訓練で避難所を開設して中学生に体験させることを計画中。

⑸　「自分の命は自分で守る。」の指導を徹底。地域との連携は、それぞれの地域、校区で全く違うので実態に合わせた課題解決を行うことが大切。

⑹　下校時に訓練として、子どもたち同士で校区を歩きながら危険箇所の確認や、今そこで災害が起こったらどのように行動するかを話し合わせることで、意識が高まる。

3　指導助言

⑴　避難訓練で考えなければいけないことは、常に当事者意識を持って行動できているかとういこと。自己防災力を高めるための手立てをしっかりと考えて行うこと。（予告なしの訓練は有効であるが、あくまでも実態に応じて行うこと。）

⑵　引き渡し訓練についても、当然のことながら災害が近づいている時には引き渡しはしない。安全・安心を確保すること。どの場面で引き渡しを行うかを想定しておく。

⑶　緊急時の備えとして、リュックやスポーツバッグに一日分学校に留まることができる準備をして、それを学校の倉庫等に保管しておくことも必要。

⑷　自治体の防災対策本部と学校が連携して、正確な情報を共有できるシステム作りが急務である。

第３Ａ（小）分科会　教育環境整備に関する課題

提案主題　極小規模校における教育環境整備に係わる教頭の役割
協議の柱　学校の取り組みだけでなく、家庭・地域と連携しながら、
「主体的な子どもを育てる」ためには教頭としてどのような手立てを講ずれば良いか。

提言者　中津市立上津小学校　　松　田　昌　夫

1　質　　疑

⑴　Ｑ　上津繁盛太鼓の他に、地域・家庭と連携していることはないか。
　　Ａ　入学式では、案内を地域に足を運んで60軒配っている。45名の来賓があった。
　　また、運動会では、老人会・消防団の方が競技に参加してくださる。通学合宿や総合的な学習の時間に花を植えて地域へ配布する活動も行っている。子どもの成長した姿を地域の方に見ていただいて、お返しをしている。
⑵　Ｑ　自尊感情を高めるため１学期に取り組んだことは。
　　Ａ　上津繁盛太鼓や一輪車に乗ることなどできている子どもには「よくできているね。すごいね。」と前向きの声掛けをし、できるようになったことを実感できるようにしている。

2　協　　議

⑴　主体的な子どもを育てるためには、何かに特化して取り組むことが必要である。上津繁盛太鼓は強みであり、６年生になったらできる特権など考えると活性化し主体性が伸びる。地域の協力が多くあることも強みである。教頭は地域とのパイプ役として外部人材を活用することを考えるとよい。
⑵　一人あたりの校務分掌が多い、出張等が多く全員がそろいにくい、自分の学級のことが精一杯で、お互い話をする機会が少ないなど小規模校の課題として共感する。ＯＪＴを取り組みにくい状況であるが、授業の内容をビデオで撮影し、みんなで検証するなど手立てはある。また、ガイド学習は経験から、子どもの主体性が伸びて感情豊かになってくる。大規模小規模に係わらず有効な手立てである。
⑶　人的環境整備が最優先である。中学校では専門教科以外を受け持たなくてはならない。小学校と中学校が近い場合は、お互いに乗り入れ授業をすることも有効である。また、地域と家庭が密接に関わっているので、学校から地域の代表者に要望し、地域から家庭に生活指導をしてもらうなど、役割を明確にすることで働き方改革に繋がる。

3　指導助言

⑴　キーワード①は「繋ぐ」まず、職員室を情報交換の場とし、教頭が職員と管理職を繋いでいくことが必要である。１日一人３分でも話をすること。また、学校と地域を繋ぐこと。通学合宿では行政と、上津繁盛太鼓や入学式など教頭が窓口となることで、繋がっていく。ガイド学習は、３ヶ月やり方を教え子どもに任せれば順応する。また、掃除や朝の会など自主的にできるようにして、授業と生活指導の両輪で自主性を育てることが大切である。
⑵　キーワード②は「うめる」職員の困りを埋めることが、教頭の役割である。児童が太鼓の演奏などで地域に出るときの連絡調整、通学バスの調整など多岐にわたっている。しかし、埋めすぎの感もある。人材育成の視点から、研究主任に任せて教頭は進捗状況を看取り、アドバイスをすることも必要である。
⑶　人的環境整備は校長の責任である。臨時講師が見つからないなど困りもある。また、小規模校では児童数で予算が割り振られるため、通信費が少ないことが考えられる。予算の増額を要請することも必要。

第３Ａ（中）分科会　教育環境整備に関する課題

提案主題　地域とともに伸びる学校づくり
サブテーマ　―小中連携を地域協育につなげるための教頭のあり方―
協議の柱　教頭として小中及び、地域と連携するための組織づくりと教育活動の推進にどのように取り組んでいけばよいか。

提言者　中津市立山国中学校　　岸　原　　宏

1　質　疑

⑴　Ｑ　地域に根差した教育を進める中で、総合的な学習の時間の展開はどうか。
　　Ａ　地域の特色を引き継ぎ、生徒たちなりのものにしていこうと取り組んでいる。ものづくりや神楽の舞の発表につなげようとしている。

⑵　Ｑ　防災教育における小中の連携の状況はどうか。
　　Ａ　小学校では、地域の災害現場を見学する等の学習をした。中学校で行った心肺蘇生の学習に、小学校の教職員も参加した。

⑶　Ｑ　小中間にある教職員の意識の差を、どのように解消していったのか。
　　Ａ　小・中で会議を重ねているものの、悩んでいるところで、助言をいただきたい。

2　協　議　（グループ協議：３グループが発表）

⑴　小中の連携は中学校１校に対して小学校多数となると難しい面がある。掃除のやり方等できるところから連携していくと良い。また、ＣＳを活用し地域に任せられるところは、地域に任せていくと働き方改革にもつながるのではないか。学校存続についは、教科担任制や部活がある中学校では存続が厳しい面があるが、小学校では少人数であっても存続している例がある。

⑵　小中の連携について、小中の意識の違いをどうするかが課題である。ある地域では、授業参観や会議等を定期的に開催している。また、ある地域では、人権教育やノーメディアデーの取り組みを小中連携して実践している。小中連携の中心となる担当者は主幹教諭が担っている学校もあるが、管理職のリーダーシップが大切である。

⑶　小中の連携は地域によって差がある。地域の実態に応じて進めることが大切である。小中の意識を埋める有効な方法は、校種間の人事交流である。校務分掌の改善については、ある学校では教職員を大きく２チームに分け、校務をそれぞれのチームに割り振っている。

3　指導助言

⑴　小中の連携、他団体との連携と様々な連携がある。その結びつきを確かなものにするのは「人と人との関わり」であり、その要となるのが教頭である。「話すこと」をはじめとするコミュニケーションを大事にしていくと良い。

⑵　ＣＳが導入されると多忙になるという意識を持ちがちだが、教職員が目的と効果を十分に共通理解するとともに、成果を共有することで達成感が得られる。そのことが次の実践へのエネルギーになる。

第３Ｂ(小)　分科会　教育環境整備に関する課題

提案主題　生徒支援に係る教育環境の整備について
サブテーマ　―不登校対策に向けた効果的な支援のあり方について―
協議の柱　教頭として、不登校を減少させるための教育環境を、
どのように整備していけばよいか。

提言者　大分市立寒田小学校　　宮　本　高　生

1　質　　疑

⑴　Ｑ　引きこもりであった児童が週２日程度登校できるようになったということだが、登校したらどのくらい学校にいるのか。また、その時関わるのはだれか。

Ａ　10時過ぎに帰ることもあれば、給食前や５校時までいることもある。専科の時間の担任や高学年の先生、ＳＳＷ、管理職が対応している。

⑵　Ｑ　プログラムを作るのはだれか。

Ａ　担任やＳＳＷ、管理職も含めて相談しながら作成。校区公民館とつなぐのは教頭。

⑶　Ｑ　欠席一覧表を使うことに教職員の負担感は無かったか。

Ａ　電話を受けたものが書き込むので、特に無い。

2　協　　議

⑴　担任が抱え込むのではなく、組織として動くことが大切である。教頭は役割や担当を明確にして指示を出していく。

⑵　新たな不登校児童を出さないために、欠席状況の見える化を図ったり、親の困りをＳＳＷやＳＣとつないだりする。また、すぐに動ける体制を整えていく。

⑶　長期の不登校児童に対しては、情報交換会を定期的にもち、その子の困りがどこにあるかを探り、教職員で共有し、改善を図っていく。

⑷　居場所と人員の不足が現状である。まずは、できるところから取り組んでいく。

3　指導助言

⑴　大分県の不登校児童生徒数は小学校368人、中学校987人、合計1355人（平成29年度）。理由は、一番は友だち関係、次いで学業不振である。不登校の子どもがいると、自分の学級経営が悪かったのではないかと、担任の負担は大きくなるばかりである。早い段階で欠席に気づく工夫をし、チームで対応することで未然防止を図り、登校時の居場所づくりと学力保障に取り組んだ結果、新規の不登校児童がいなくなったという点で、担任の負担軽減につながっている。

⑵　中学校になると不登校生徒数が２倍になることから、今以上に小中の連携を深めてほしい。

⑶　職員の居場所づくりも必要である。

第３Ｂ（中）分科会　教育環境整備に関する課題

提案主題　働き方改革（教職員と子どもに向き合う時間を確保し、教育水準の向上）を推進するための、文書事務等における教頭としての改善の取組

協議の柱　合理的、効率的な学校事務を執行するための、事務方との協働的な取組における教頭の在り方
①小規模校におけるＰＴＡ事務局事務等の分担や負担軽減の具体策
②市教頭会と学校支援センターとの協働の在り方

提言者　臼杵市立野津中学校　　山　上　裕　二

1　質　　疑

⑴　Ｑ　一斉メールの活用拡大について
　　利用率が高いのは、保護者にどのように呼びかけをしているのか。
　　Ａ　緊急時の連絡方法であることなど保護者に大切さを呼びかけている。

2　協　　議

⑴　事務職員が学校にいるかいないかが大きい。
　　支援センターの役割　　報告文書等の取りまとめができるか。
⑵　ＰＴＡ事務の仕事をだれが行うのか。
　　教頭・教務・主幹・担任・ＰＴＡ事務局員
　　保護者の全員参加が難しくなってきている。
　　本来はＰＴが二人三脚で行うもの。
⑶　仕事の振り分け
　　「去年は教頭がしていた。」　仕事は増えるが減らない。
　　新しい仕事はとりあえず教頭に。本来の業務ではない内容もある。
⑷　スクールサポーターの活用
　　印刷、配布をしてくれるだけでも助かっている。
⑸　郡市による違い
　　事務の仕事や情報機器環境など、他郡市から着任すると分かりにくい。
　　一人で抱え込み過ぎないように。

3　指導助言

⑴　業務の多さに共感できる内容であった。教頭の仕事の軽減ができないか。
　　「仕事をきちんとこなしても、誰も褒めてはくれない。」
⑵　文書量の多さや締め切りに追われる教頭。
　　「一人のキャッチャーに、何十人のピッチャーがボールを投げているよう。」
⑶　郡市の交流を行うことで、より良い方向を探ることはできないだろうか。
⑷　教頭は学校の要。教頭がいないと学校が回らない。
　　働き方改革を是非進めていってほしい。
　　ときには、学校のことを忘れてリフレッシュしてほしい。

第４Ａ（小）分科会　組織・運営に関する課題

提案主題　地域とともに歩む学園づくり
サブテーマ　―家庭・地域との継続的な連携・協働を目指して―
協議の柱　家庭・地域と継続的に連携・協働していくための教頭の役割

提言者　佐伯市立蒲江翔南小学校　　吉　田　　浩

1　質　　疑

⑴　Ｑ　学校運営協議会（ＣＳ）のメンバーに学校教育目標や教育理念を浸透させるために、どのような工夫をしているか？

Ａ　「地域とともに歩む学園づくり」の理念を具現化するために、最も適当な人材を時間をかけて選定していった。また、自治会長を通して学校教育目標等を浸透させている。

⑵　Ｑ　「里帰り授業」は教育課程においてどのように位置づけているか？

Ａ　特別活動として教育課程に位置づけ、金曜日の午後、各地区で実施している。

⑶　Ｑ　小中連携をどのように行っているか？

Ａ　小５、６の英語、小３の音楽の授業を、中学校教諭がＴ１、小学校担任がＴ２として教科の専門性を生かした指導を行っている。また、全教職員が５つのチームに分かれて、月１～２回チーム会議を行っている。小中学部の全教職員がベクトルを揃え、協力して教育活動を展開していくことで教育効果を上げている。

2　協　　議

⑴　地域との連携活動については地域からの要望事項が多く、やらされ感もある。ただ、ＣＳを導入することによって家庭や地域の協力を得やすくなるというメリットは大きい。

⑵　地域との連携を進めていく中で，地域住民の思いと教職員の思いのずれが明らかになってきている。地域とのつながりを深めるとともに、教職員とコミュニケーションを密にとることで、その「ズレ」を解消していくことが教頭の役割の一つである。

⑶　学校だよりやホームページ等で学校情報を発信したり、公民館等での会合に積極的に参加したりすることで、地域とのつながりを深めていく必要がある。ただ、地域住民の高齢化が進む中で、従来とは異なる学校と地域との連携の在り方を探っていく必要がある。

3　指導助言

⑴　家庭・地域との連携を好循環にするのか、悪循環にするのかは、自分次第である。学校のために地域が何をしてくれるのかを待つだけではなく、地域に対して学校は何ができるのか、双方がＷＩＮ－ＷＩＮの関係をつくり出すことが大切である。

⑵　校長が地域との関係をつくり、それを調整していくのが教頭の役割である。学校教育目標を踏まえて総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントをすすめていく必要である。その際、スクラップアンドビルドを意識することで、働き方改革との整合性を図ることが重要である。

第４Ａ（中）分科会　組織・運営に関する課題

提案主題　学校教育目標達成に向けて組織的に取り組むための教頭の役割
協議の柱　学校教育目標達成に向けた組織づくりとその組織を円滑に進めるための教頭の役割はどうあればよいか。
人材を育成する意味での関わりは、どうあればよいか。

提言者　佐伯市立直川中学校　　市　川　　満

1　質　疑

⑴　Ｑ　学校教育目標とプロジェクトチームの取組の関連や決定までの経緯は。

Ａ　昨年度まで機能していた３つのプロジェクトチームを生かす形で、校長が学校教育目標を設定した。その際、２つのチームリーダーは学年主任、１つは生徒会担当が担っている。取組内容等は、運営委員会で審議決定している。

Ｑ　目標管理シートを決定する際に、教頭はどう関わっているのか。

Ａ　チームの目標と個人の目標が連動するように指導・助言をしている。

⑵　Ｑ　提案内容は、プロジェクトチームで検討しているのか。

Ａ　チームで検討する時間が余りないため個人で提案することが多い。運営委員会に図る前に、校長・教頭が目を通している。

2　協　議

⑴　小規模校では、経験年数が少なくても多くの分掌を担当せざるを得ない。若手教員には教頭や教務主任がサポートする必要がある。

学校教育目標は、知・徳・体の３つではなく２つ程度に絞っても良いのではないか。大規模校では、40～50代のベテラン教員を活用することで、若手教員の育成と組織の活性化につながるのではないか。

⑵　教頭の役割としては、各分掌間の連絡調整と進行管理が大切である。早目の声掛けをすることで、見通しを持った提案を促すことができる。また、プロジェクトチーム内での相談の機会を持つことで、若手の人材育成につながる。その際、サポートをするベテラン教員のやる気を引き出すための声掛け・コミュニケーションが欠かせない。

⑶　学校評価４点セットと連動したプロジェクトチームの編成が必要である。分掌会議や運営委員会の運用も学校規模に応じた工夫も大切である。その際、チームリーダーに自覚を持たせるためにも意識改革が必要である。また、既存の学年部の活用も組織活性化につながるのではないか。

3　指導助言

⑴　ベテラン教員の良さを認めることで、意欲を引き出していきたい。教員一人一人の力量を見誤らない。与えられるミッションや求める内容が異なるため、期待通りの成果がなくても、前向きな実践が見えたときの言葉かけが特に重要になる。

⑵　若い人に責任ある仕事を任せることで、人材育成につながる。

⑶　小規模校では、学校教育目標を焦点化してもよいのではないか。

第４Ｂ（小）分科会　組織・運営に関する課題

提案主題　学校教育目標の実現に向けた、学校・家庭・地域の組織的取組と教頭の役割
サブテーマ　―地域の力をフル活用した取組の継続をめざして―
協議の柱　教職員が地域との連携に、より取組みやすくするための教頭の役割や動き方

提言者　杵築市立山香中学校　　小　野　誠　司

1　質　　疑

⑴　Ｑ　同じような極小規模校で学校運営協議会の委員が高齢化していて、後の人選に苦労している。人選についての悩み、または今後の課題等があれば。

Ａ　人選では、老人クラブの力を借り、もめることがなかった。地域の老人クラブの中で人材育成の取組をしているように見える。住民皆が地域を守っていこうとする地域柄の影響かも。地域コーディ―ネーターはいるが、この地域では別の役割を担っている。

⑵　Ｑ　組織体制の整備の重要性がわかった。学校の組織的な取組があれば具体的に。

Ａ　例えば「四反田学級」。地域と学校をつなぐ取組。学校（担当職員）と連携しながら、ＰＴＡ専門部が中心となり、老人クラブやＪＡ壮年部（一昨年まで）も関わっての取組み。担当職員の存在が大だが異動時のことを考えてマニュアル化を図った。

2　協　　議

⑴　各学校で異なる学校運営協議会のもちかた

ＣＳ担当が教務主任の学校では、小中合同会議。地域との取組は、すでにつながりができているので学年ごと。統合した学校では、ＣＳ担当は副校長で本年度はスタンダードづくり（取組み方・人材・めざすところ等）に取組んでいる。

⑵　組織での取組の大切さ

学校、保護者、地域が一緒に課題や取組等、話し合う場を設定した学校、今年度組織を立ち上げたがこれまでのつながりを生かし、地域の負担を配慮しながらできることから始めた学校等があった。地域力をいかに生かした組織やしくみを作っていくかが大切。

⑶　組織的取組の状況と課題

学習サポーター的な係や学習環境整備の取組は有効だが、教頭が実質的窓口の部分もまだある。従来の組織の看板のかけ替えに終わらず、整理と再構成が必要。

3　指導助言

・地域の思いをしっかり受けとめることが大切。
・組織の運営上、地域のコーディネーター的役割の方の活用は有効。小規模校は組織化が難しいので学校の現状等、情報を地域と共有し、取組みやすい形を考えていく必要がある。
・一方的な取組みでなく、レポートにあるような地域と学校が双方有効（win-winの関係）で持続可能な取組みを。
・リサーチし、ビジョンをもち、方針・戦略設定、環境づくり、人材育成、健康管理が大切。

第４Ｂ（中）分科会　組織・運営に関する課題

提案主題　人材育成・働き方改革に組織として取り組むための教頭の役割
サブテーマ　―「協働」の組織となるために―
協議の柱　教頭として、人材育成・働き方改革にどう取り組むか

提言者　日出町立日出中学校　　藤　原　　健

1　質　　疑

⑴　Ｑ　人材育成で大分県公立学校教員育成指標の活用はどのように行っているのか。
　　Ａ　校長が６月と11月に本人に自己評価し提出させる。評価システムの面談時に資料として活用したり全職員の集計結果をもとに学校の課題としてとらえたりしている。

⑵　Ｑ　勤務時間の管理以外の働き方改革の取組はどのようなものがあるのか。
　　Ａ　担当が文書を作成するが、教頭が確認して責任を負っている。研修は新聞を活用し、意識改革を図っている。朝の連絡会を減らしたり、運営委員会で協議事項は決定して職員会議は共通理解の場としたりして会議の時間短縮をしている。

2　協　　議

⑴　人材育成について
・職員の年齢構成が２層に分かれている現在、ベテランの指導方法などが若い世代に伝授されやすいような雰囲気や場の設定などが必要になる。
・若い世代にも主任等を担当させながら指導をしていくことも大切である。
・評価システムの面談等を利用して学年の中で指導が行き届いているかを確認していかなければならない。

⑵　働き方改革について
・学校行事をなくす、減らす、見直すなどを話し合うプロジェクトチームをつくらなければ前年踏襲では、働き方改革にはつながらない。
・会議の縮小（時間設定）や提案文書の事前提出などをすることで時間の生み出す工夫をする。タイムカードを打つことで退庁時間を意識するようになる。

3　指導助言

⑴　人材育成については、育成指標の活用やＯＪＴのスケジュールができている。若い先生を任用し、ベテランの先生のモチベーションを上げる手立てをとる必要がある。

⑵　働き方改革については、校長を中心に前年踏襲からの脱却が行われている。組織として確立しており、協働のスローガンが可視化されている。本当に子どもにとって必要なものかを考えてスクラップし、ビルドをするときには改善を行っている。校務システムなどで会議をすることも考えていかなければならない。

第５Ａ（小）分科会　教職員の専門性に関する課題

提案主題　教職員の自己研鑽・人材育成のための働き方改革
サブテーマ　―機器の利用による教職員勤務時間削減の取り組み―
協議の柱　教頭として、職員一人一人がその持てる力量を十分に発揮し、
健康で働き続けるためにどのように働き方改革を進めていけばよいのか。

提言者　大分市立滝尾小学校　　長　野　尊　弘

1　質　　疑

⑴　Ｑ　公用携帯電話は学校においていたほうがよいのか。

Ａ　公用携帯電話は原則持ち帰らないようにしている。ただ台風接近などの際や自己申告で持ち帰りの時もある。

⑵　Ｑ　教職員出退勤管理システムは、教頭のパソコンを電源オンにしなければならないが、 教頭が朝からいない時はどのようにしているか。

Ａ　本校は教頭のパソコン１台以外に教務のパソコンでも作動できるようになっている。また、一晩電源をオンにしたままや校長にパソコンをたちあげてもらう時もある。

2　協　　議

⑴　小規模校は、校務分掌が一人に偏り出張等から学校に戻り、超勤をしていることが多い。人員の確保など関係機関に要望を出していくことが必要である。第１、３水曜日は定時退勤日というのが設定されて、17時までには退勤するという全市あげてのシステムで、教頭としても退勤を呼びかけやすい。

⑵　計画的な機器の導入はうらやましいが、出退勤システムのＩＣカードをかざし忘れがいないかなど教頭の仕事が増えている面もある。電話音声アナウンスの導入で、保護者からのクレーム対応の時間に制限がかかり、公私の区別や精神的負担の軽減になっている。

⑶　機器の導入により、子どもに向き合う時間が増えたり、自分にできることを若手教職員に伝える時間を放課後に設けＯＪＴができるようになったりしている。保護者もこれらにより意識が変わることが重要である。

3　指導助言

⑴　働き方改革の観点として①意識改革、②業務改善、③部活動の在り方、④役割の見直しがある。

⑵　意識改革や業務改善の点で、限られた時間の中で自分たちがどれだけ仕事をしているのか把握すること、マニュアル化してデータや文書などそろえて次にうまくつなぐこと、持ち帰り仕事のなかで自分の研究と仕事を整理することが大切である。

⑶　市町村で機器が導入されるなど条件は違うが、何が有効なのかを検討しながら、働き方改革について学校運営協議会や学校評議員会などでも話題にし、地域や保護者にも伝え、意識改革を進めていく必要がある。

第５Ａ（中）分科会　教職員の専門性に関する課題

提案主題　教職員の力量を高める環境づくりについて
サブテーマ　―小・中学校の連携を通した教職員の専門性の向上と教頭の役割―
協議の柱　教頭として、教職員の力量を高める環境づくりをどうすすめればよいのか。

提言者　大分市立竹中中学校　　志　田　やよい

1　質　　疑

⑴　Ｑ　小中一貫教育を進めていて、大分市の方で加配の先生がいるのか。また、中学校の先生が小学校にも授業に行くということで、制度上兼務辞令が出ているのか、それとも独自で知恵を出し合ってやっているのか。　（宇佐市南院内小）

Ａ　加配は特にない。音楽だけ兼務辞令が出ていて、授業のコマの中に入れている。入学式・卒業式の指導もすべてしていて、行事の時はつきっきりになる。

2　協　　議　（グループ討議：３グループが発表）

⑴　教職員の力量を高める環境づくりは正直難しい。必要性が必要。必要性を感じれば研修をする気持ちが強くなる。秋田では、多くの先生方が視察に来て、見られることにより必然的にやらざるを得なくなったと聞いた。必然性をつくることも教頭の役目の一つではないか。適材適所に職員を配置し、指導していくことも必要である。

⑵　小中連携の取組について、郡市ごとにやり方が違い、それぞれやりやすさなどについて話した。教頭として、連絡、調整、早めの提案などそういう声かけはできるが、力量を高めるところまでいかない。職員が増えることが、子どものためにもなると考える。

⑶　小中一貫に関しては、学校、地域によって違いがある。小中一緒に授業研究に取り組むことによって、授業力が確実に向上する。小学校の先生は、考え方や指導が丁寧だと感じる。小学校では、教科担任制ができる学校とできない学校がある。中学校では、縦割りの授業で授業力が向上している。またＯＪＴの取組も大切。

3　指導助言

⑴　小中一貫教育の背景の一つに中一ギャップがある。自己肯定感をどう高めていくかが課題である。小中一貫教育では、めざす子ども像を小中で共有すること、９年間を見通した教育課程をつくることが必要。

⑵　小中の文化はとても違う。その違いを知り自分たちの文化を違う目で見て、理解し合いながらやっていくことが大切。授業力の向上についても、小学校の先生の細かい配慮、中学校の先生の専門性をお互い影響し合っていってほしい。

⑶　教頭は学校にいて、小中一貫教育になかなか絡みにくいところもあるが、今日話題に出た言葉かけや校種をこえた人間関係づくりをして進めていってほしい。教頭に必要なのは①危機管理、②校長のビジョンを理解する力、③管理職としての自覚・使命、④校長の考えを職員に伝える力。学校の司令塔として小中連携の幅を広げていってほしい。

第５Ｂ（小）分科会　教職員の専門性に関する課題

提案主題　義務教育９年間で育む　地域とともに生きる　子どもの育成
サブテーマ　―小・中一貫教育の推進と教頭の役割―
協議の柱　教職員の意識をつなぎ、授業力を高めるために教頭としてどうあればよいか。

提言者　豊後大野市立朝地小学校　　佐々木　直　子

1　質　　疑

⑴　Ｑ　小中乗り入れ授業で空き時間が減ることに対しての職員の負担感は？また評価は誰がするのか？
　　Ａ　小中両方の負担になっているのは確かで、働き方改革の課題と考える。評価は授業者が行う。
⑵　Ｑ　小中連携の取組に対する保護者の反応はどうか？
　　Ａ　温かい言葉かけや責めない姿など、連携行事を通して心が育っていることを保護者も感じている。
⑶　Ｑ　１つの取組に対して分掌ごとに役割を振り分けたり、各段階で分担を変えたりしていく意図は？
　　Ａ　複数のミドルリーダーに取組の意義について理解を深めてもらうことで、全体の意識の共有につながると考えるから。

2　協　　議

⑴　年齢構成が幅広くなってきた昨今の現場において、若手とベテランをつなぐ、より組織的な取組が必要になってくる。教職員の意識をつなぐために、どこに火をつけるかが大事である。
⑵　授業力を高めるためには、互いの授業を見合うことはやはり大事なことである。また教頭として１日に１回でも授業を見に行き、授業風景や板書を写真に撮るなどの工夫をして事後指導に役立てたい。
⑶　小中連携の授業見学では、小学校の課題の引き出し方や丁寧さ、中学校の専門性などを学び合える。日常的には交流の時間が取りづらいので、“必ず行く日”を設けるなどの計画立てが必要である。
⑷　乗り入れ授業や小中の互見授業では、小学校高学年の育ちを中学校の教師が見取ったり、中学校に送り出すための指導を小学校の教師が意識したりと中１ギャップの解消につながるメリットが大きい。また、乗り入れで授業を見合うことでＯＪＴの機会にもなる。
⑸　小中連携や様々な行事の取組に対して、負担感が大きければ効果が上がらない。教頭として会議、行事の精選とともに加配の要求なども行っていくことが必要。また、教職員の意識をつなぎ、上げていくためには、どのような子どもを育てるのかというゴールとその見通しを共有することが重要である。

3　指導助言

⑴　教育委員会の方針、校長のビジョンをどう具現化していくかが教頭の役割である。さらにそれを小中一貫で、学校教育目標を共有して行うことは難しいことであるが、朝地小・中では、教務・研究主任を中心に分掌ごとに目標を立てさせ、個人の目標管理シートに反映させて共有化したことがすばらしい。
⑵　９年間を見通した教育課程の編成や乗り入れ授業等の校種間交流は大事である。“15の春”にどんな子どもを育てたいのか、そこまでのつながりが見える縦断的・横断的教育課程の作成は評価できる。
⑶　教職員の意識改革のためには、目標の明確化が重要である。働き方改革の裏でさらに忙しくなる中、子どもたちをどのように育てていくか、そのために教職員にどのように働いてもらうのかを管理職が考えていくことが大切である。

第５Ｂ（中）分科会　教職員の専門性に関する課題

提案主題　教職員の「資質・能力」の向上を目指した教頭の役割
サブテーマ　―経験豊かな教職員の活用と協働的風土づくりへの取組―
協議の柱　職務や分掌に応じた力量やリーダーシップを向上させるために
教頭としてどのように関わるか。

提言者　竹田市立緑ヶ丘中学校　　阿　孫　裕　司

1　質　　疑

⑴　Q　年間スケジュール表の縦軸「小・中」の意味。
　　A　これは、「中分掌」「小分掌」という意味で分類の区分け。
　　Q　互見授業を上手に進める方法。
　　A　中学校の小規模校は先生方の空き時間が多いので、教務主任に日程調整をお願いして互見授業を進めている。
　　Q　朝の20分間を確保してプロジェクト会議を進めているようですが、どのような運営をしているのか、また、その間生徒は何をしているのか。
　　A　火・木曜日の朝にプロジェクト会議を開催している。生徒はその間、管理職が入り一緒に朝読書をする。この時間の割り振りは校長のリーダーシップの下、発案されたものである。

2　協　　議

⑴　教頭としてリーダーと若手を育てる視点をもつことが大事である。力量やリーダーシップを向上させるためには、ミドルリーダーには、責任をもたせて仕事を任せたり、若手には、経験豊富な教職員を活用してＯＪＴを行わせたりすることが重要である。教頭も、若手に対して一方的に指示するだけでなく、個別に対応して考えさせたり、一緒に話し合ったりしながら育てていく必要がある。

⑵　年齢構成に偏りがあり、50代後半教職員のモチベーションなどに課題がある場合は、個別対応をしていくのか、若手と組ませるのかなど教頭が職場やその人の状況を考慮して、臨機応変に対応することが求められる。

3　指導助言

⑴　主要主任等は校長が決定するが、それをどのように活用していくのかが教頭の仕事になる。一方的でなく、相談しながら進めることが大切だ。

⑵　会議室に掲示された校務分掌スケジュール表を教頭がチェックをしていき、職員がそれを見ながら業務について会話している姿から、スケジュール表はとても有効であると感じる。今後は、教育課程の概要をスケジュール表にまとめることにも挑戦してほしい。職員も進行状況がわかるが、生徒にとっても今の自分たちの位置を確認できるのではないか。

⑶　私たちは何を目的に教育活動を行っているか再確認する必要がある。形通りに教育活動をすることが目的になっていて、本来子どもたちをどのように育てるかという目的が見失われている。目標が目的になっていないか職場で十分に議論してほしい。

第１課題「教育課程に関する課題」第１Ａ分科会

成果

○　地域が活性化するようにという目標を設定して、活動を副校長・教頭が組み立てる。教職員をうまく引き込みながら、細かな部分を教職員に引き継いでいくことができている。

○　活動をケーブルテレビなどのメディアを使いながら、発信していくことができている。発信が、地域の方の関心を呼んで、学校に注目されるようになり、学校と地域の活力になっていった。

○　町づくり協議会などの会の中では、どうしても前年度の反省や改善点がはっきりしないまま、次の年度を迎えてしまう。副校長・教頭が、その点を補って記録し、改善点を協議会に示していくことができていた。チェックとアクションの強化が必要である。

○　支援の必要な子どもや不登校などの課題に対して、誰が何をするのが決めて取り組むことがとても大切である。副校長・教頭がその役割を担って、まず情報を収集し、誰が取り組んでいくのか割り振りを行っていくことができた。

課題

△　小さな学校だからこそ新しい活動に取り組めることができるが、大きな学校では決まった活動をすることはできるが、新しいことには取り組みにくい。

△　ＰＤＣＡの短期サイクルをきちんと機能させていかなければならない。そのためには、見直しの時間をきちんと設定することが必要である。しかし、その時間の確保や、やり方を工夫しなければ、教職員への負担増となる。副校長・教頭として各校の実態にあわせて検討しなければならない。

△　教職員も地域協議会へ参加することで、学校の意見を協議会へ浸透させることができるようになるのではないか。教職員への負担もあるが、役割分担を明確にして、一人一人の意識を改革していくことでよりよい協議会をめざすことができる。

第１課題「教育課程に関する課題」第１Ｂ分科会

成果

○　提言をもとに「教育資源を生かしたカリキュラムマネジメント」と「教育課程の管理」について、具体例や現場での困り等を出し合いながら、全体やグループで活発な協議を行い、副校長・教頭の役割を議論し深めることができた。

○　地域との連携については、学校教育目標からどのような力をつけたいのかを明確にした上で、校内担当と地域協育コーディネーターがより密に連携したり、学校運営協議会をより積極的に活用させたりして、人的・物的資源の確保・開発を行っていくことが大切であることが確認された。

○　教育課程の編成・管理は、教務が多くの役割を担っているが、学校教育目標達成のためにゴールへの見通しを持ち、指導・助言を行うことが必要であることを確認できた。

課題

△　人事異動により学校と地域とのパイプが切れないように、人材バンクの整理や地域担当者の引き継ぎを確実に行うことが必要である。

△　学校によって実態の違いがあるが、特別支援学級の取り出し授業と交流学級の教科との関係で、授業の調整に苦労している学校が多く見られた。児童生徒の負担にならないよう各校で工夫が必要である。

第２課題「子どもの発達に関する課題」第２Ａ分科会

成果

○　発表をもとに「支援を必要とする児童に対する組織的な対応」や「ユニバーサルデザイン授業の実際」について、各学校での取組を出し合いながら、グループや全体で活発に情報交換が行えた。

○　副校長・教頭として組織的な対応をとるためには、①情報をとらえるためにアンテナを高くしておくこと、②教職員とのコミュニケーションを常に取っておくこと、③会議等の連絡、調整と会議の評価、見直しを行うことが必要だと確認できた。

○　郡市により支援の体制に違いはあるが、副校長・教頭は各主任に指導助言を行いながら、仕事を任せて見守ることも大切だと確認できた。

課題

△　組織的な対応をするためには、教職員全員のベクトルを同じ方向に向かせることが必要であり、そのための関係づくりが大切である。その関係づくりが副校長・教頭と教職員にとどまらず、教職員間にも拡げていくことが課題である。

△　各種会議や児童・保護者対応等により多くの超過勤務が生まれやすくなっているのが現状である。また、子どもを中心にして仕事に励む教職員が多い中、教職員の健康と生活を守る視点からの働き方改革に基づき、負担軽減の方策を考え実行していくことも必要である。

第２課題「子どもの発達に関する課題」第２Ｂ分科会

成果

○　どちらのレポートも校種・学校規模に関わらず、どの学校でも課題としている事例を取り上げていたのでグループ協議を深めることができた。

○　支援の必要な子どもの実態に応じた組織的な支援体制が不可欠となる。その要となり、連絡・調整、進行管理に尽力するのが副校長・教頭の役割であることを再確認できた。

○　防災意識を高め、命を守る行動がとれる子どもを育成するための取組が各校で進んできている。いかに当事者意識を持たせるのか、ＴＰＯに応じて主体的に判断し、行動できる子どもを育てるためにどうすればいいのか。校内の取り組みのリーダーとしての副校長・教頭の果たすべき役割の重要性について共有できた。

課題

△　全てに通じ、全てに関わる副校長・教頭ではあるが、副校長・教頭は連絡・調整、進行管理を任務の核とし、それ以外の業務を校内の各担当にいかに役割を分担させるかが今後の課題である。

△　防災・減災教育の充実が求められる中、校内で副校長・教頭が果たすべき役割は大きい。防災・減災教育の取組が遅れている学校においては、先進校の事例を学び、早速取組を始めることが必要である。

△　各学校においては、自校の防災教育・減災教育が当事者意識を持たせ、ＴＰＯに応じて主体的に判断し行動できる子どもを育てるものとなっているか、再確認することが必要である。

第３課題「 教育環境整備に関する課題 」第３Ａ分科会

成果

○　小規模校における副校長・教頭の役割に加えて、「学校存続」と「働き方改革」の視点からも協議を深めることができた。

○　教職員と子どもを「つなぐ」、学校と地域を「つなぐ」役割を担い、ガイド学習や太鼓の体験活動を通して、子どもたちの自己肯定感を高めていった丁寧な取組が確認された。

○　小中連携を地域協育につなげるさまざまな工夫が確認された。校務分掌の大幅な見直しや小中合同の組織づくり等が、働き方改革にもつながることが共有できた。

課題

△　小規模校での多岐にわたる副校長・教頭の役割を、人材育成も念頭に置いて、他の教職員に任せていくことも大切であり、そのためにも機能的な組織づくりが必要である。

△　地域や関係機関との連携をすすめていくとき、総合的な学習の時間を核として、９年間を見通した教育活動を教科等横断的な視点を持って構築することが必要である。

第３課題「教育環境整備に関する課題」第３Ｂ分科会

成果

○　学校の諸課題を解決するため、副校長・教頭が一人で仕事を抱え込むのではなく、教職員それぞれに仕事を的確に分担し、責任をもたせることで、組織としてより一層活性化していくことを確認することができた。

○　不登校児童の対応については、まずは状況を「見える化」し、全職員で共有することが大切である。そのために欠席把握シートの活用、不登校対策委員会の開催、ＳＳＷの活用、地域や関係諸機関との連携等を行い、初期対応を素早く行うことによって未然防止に努めることの大切さについて共有できた。

○　働き方改革をどのように進めていくか、現状の取り組みの様子を情報交換することができた。それぞれの学校や郡市のよいところを交流し積極的に取り入れていくことが教頭会の意義の一つであると確認し合った。

課題

△　不登校が長期化する場合、子どもの困りに寄り添いその背景にあるものを丁寧に探っていかなければばらない。そのための居場所づくりや人材の確保などが課題である。

△　調査文書が増加している傾向にあり、また、出退勤システムなどの新しい仕事や分掌に振り分けにくい仕事などは、副校長・教頭の仕事となってしまうことが多い。働き方改革を進めるために、事務職員の全校配置、校務をサポートする人材の配置、校務支援システムの統一、調査の精選等を要望していくことが必要である。

第４課題「組織・運営に関する課題」第４Ａ分科会

成果

○　校務分掌の有機的な構築に向けて学校評価の４点セットとリンクさせることが重要だという確認ができた。
○　学校便りやＨＰ等学校公開のツールの有用性を再確認できたと同時に、管理職が配布していくことで地域とのつながりを密にすることができた。
○　ＰＴ（プロジェクトチーム）の活用によって、副校長・教頭のリーダーシップのもと教職員の人材育成にもつなげることができた。
○　地域にある様々な組織（各協議会）の違いを正しく認識し、連携することができた。
○　ＣＳ（コミュニティースクール）の活動を具体的に仕組んでいくことが連携につながるという確認ができた。
○　管理職のマネジメント力のさらなる発揮が必要であるという認識を共有できた。

課題

△　様々な行事ごとに検証を行い、ＰＤＣＡを活用した分掌の見直しが必要。
△　教務主任との連携を基にして、カリキュラムデザインを教務主任にもっと任せることが必要である。
△　地域の各組織との有機的な結びつきが必要である。
△　GIVE＆TAKEの意識で臨むのではなくWin＆Winの意識で臨む必要がある。
△　職場のベクトルを揃えるという視点での人材育成が必要である。
△　副校長・教頭としての役割分担をさらに検証する必要がある。地域・家庭・保護者のそれぞれの思いのずれを埋める必要がある。
△　ＣＳのメンバーや組織によって左右されることもあり、副校長・教頭として連絡調整は難しい。担当者の役割を理解させながら進めることの難しさを確認できた。
△　分掌の中にＰＴと学年部とリンクさせる工夫はできないものか。
△　小規模校は特にミッションの焦点化（例えば学力）することも必要ではないか。

第４課題「組織・運営に関する課題」第４Ｂ分科会

成果

○　二つの提言は「人材育成・働き方改革」「コミュニティ・スクール」という、どの学校においても直近の課題となるテーマを取り上げており、グループ協議での活発な意見・情報交換につながった。
○　「人材育成・働き方改革」に関しては、「チーム学校」として学校全体を同じベクトルで共通理解すること、各主任等を中心としたミドルリーダーを育成すること等が副校長・教頭の重要な役割であることを再確認できた。
○　「コミュニティ・スクール」については、地域と学校とのつなぎ役としての副校長・教頭の役割は大きいということ、また、「地域を愛する子ども」の育成に向け、コーディネーター役の位置づけが重要であることが確認された。
○　いずれのテーマについても、副校長・教頭は教職員間あるいは地域と学校を繋ぐ重要な役割を担っており、そのためのコミュニケーション力等を高めていかなければならないことが再確認された。

課題

△　「人材育成・働き方改革」に関しては、今後も継続的・計画的な取組が必要である。ＯＪＴのスケジュール化や若い教職員の主任への抜擢、思い切った学校行事等の見直し（スクラップ）とＩＣＴ機器の効果的な活用等の取組が課題である。
△　「コミュニティ・スクール」に関しては、持続可能な取組にしていくために、地域の方々に「協力していただく」ことだけでなく、子どもの成長の姿等を学校から地域へ発信し、成果を感じてもらい、そこから新たな「やる気」を生み出すことも必要である。
△　地域の大切な人材を今後の学校教育に活かしていくためには、副校長・教頭が詳細な記録を管理・蓄積し、次年度に向けてそれらを確実に引き継いでいくことが必要である。

第５課題「教職員の専門性に関する課題」第５Ａ分科会

成果

○　機器の利用による教職員勤務時間削減の取組について、現状や実態が細かく分析され、教職員・管理職ともに課題を共有し、特に『出退勤システム』では勤務時間の把握が容易になり、勤務時間削減への意識高揚につながっていることが示された。また、『公用携帯電話の使用』や『勤務時間外の電話音声アナウンスの導入』により急な生徒指導や苦情対応に追われることがなくなり、帰宅しやすくなったことが確認された。

○　教育委員会の施策を有効活用することも働き方改革を進めていく上で効果的であることを共有できた。

○　小中連携を通した教職員の力量を高める環境づくりについて、「副校長・教頭の関わり」を切り口に、教職員の指導力を高めるために、これまでの取り組みの見直しが進められ、その資料の中に教職員に対する「副校長・教頭」の直接的・間接的なアプローチが具体的に明示されており、その関与性が確認された。

○　副校長・教頭として分掌の監督・指導だけでなく、校種を超えた教職員の人間関係づくりの中心になっていくことが必要であることが共有された。

課題

△　超勤理由の詳細なデータ分析とその分析に基づいた超勤防止策を策定したり、超勤を削減するための超勤内容の精選や効率化を図ったりすることが課題である。

△　精選や効率化によって生み出された時間の活用の仕方を工夫して、自己研鑽や人材育成につなげていくことが必要である。

△　教職員の力量向上については、模索中の学校が多く、若手やベテランの組み合わせ、モチベーションの上げ方など人員配置や分掌の分担に工夫する必要がある。

△　連携の効果をあげるために、教育課程の見直しや行事のねらい・目的をしっかり見直し、児童・生徒の成長につなげていくためにも副校長・教頭間の連携強化が必要である。

第５課題「教職員の専門性に関する課題」第５Ｂ分科会

成果

○　教委・校長の方針・ビジョンをどのように取り上げ、活用・助言し、教職員の意識をつないでいくかが副校長・教頭の役割であると確認できた。

○　ミドルリーダーを育てるには、主要主任等と管理職との話し合いが大切であり、副校長・教頭として教職員の適性を把握し、学校に合った取り組みがすすむように工夫することが必要である。

○　仕事を任せることが人材育成には極めて有効である。更に円滑にすすめるために副校長・教頭がスケジュール表を作成して進捗状況がすぐに把握できるようにしたり、ＩＣＴの活用やデータの共有できる環境を構築したりすることが大切であると確認できた。

○　教職員の年齢構成も様々である。ＯＪＴや複数の教職員で指導を行うこと、小中連携であれば乗入指導を行うことで、授業力改善や人材育成につながることが共有できた。副校長・教頭として、多忙ではあるが極力学級に出向き授業観察を行い指導助言することや教職員との日常のコミュニケーションの大切さも確認できた。

課題

△ますます忙しさが感じられる中で、働き方改革が急務である。管理職がリーダーシップをとり、会議や行事の精選を図っていくことや負担感をなくしていくことが必要である。

△　学校規模も様々であり、校務分掌の掛け持ちや仕事量のバランスが話題となった。小規模校の副校長・教頭では事務や授業等を担う場合もある。会議や研修時間の確保が課題としてあがった。

△　子どもたちをどういうふうに育てていきたいか、子どもたちのために何ができるかを話し合っていく必要がある。そのために教職員の意識・モチベーションをどのように高めていくかが課題として出された。

あ　と　が　き

今年度は第11期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」の３年次として、これまでの研究の成果・課題を踏まえたある意味仕上げの年となりました。

研究を進めるにあたって常に意識しておくことは、

３Ｃ……継続性（continuity）
　　協働性（collaboration）
　　関与性（commitment）です。

この３Ｃの視点を踏まえ、自らの力量を高め、学校現場に役立つ実践的な研究を推進し、「教頭としてどうあるべきか」ということを常に意識しておくことが重要です。

本研究大会においてもこの３Ｃの視点に基づいた報告がなされていました。参加された多くの先生方にとって、本研究大会及び各提言が課題解決に向けた成果の共有、今後の実践にむけた意欲へとつながっていくことを願ってやみません。

来年度は第12期全国共通研究主題「未来を生きる力を育む　魅力ある学校づくり」キーワード　自立・協働・創造　のもと、第11期の研究の成果と課題を踏まえつつ、継続して研究に取り組んでいくことになります。

持続可能な社会の担い手となるべき子供たちが、予測不可能な答えのない課題に自分なりの答えを導き出せる力をつけていけるような、そんな「魅力ある学校づくり」をしていかなければなりません。

私たち副校長・教頭は、それぞれの場所でそのような魅力ある学校の「要」となるべく、今後も一層研修を深め、職責を全うしていくことをここに確認し、あとがきといたします。

最後に、大会開催にあたり多大なご指導・ご支援をいただきました大分県教育委員会、大分県小学校長会、大分県中学校長会に厚くお礼を申し上げるとともに、大会成功に向けご尽力いただいた佐伯市教頭会の皆様に深く感謝いたします。誠にありがとうございました。

令和元年８月

大分県公立学校教頭会
研究部長　汐　見　美　樹